

ロシアSF瓦版 「かぜのたより」 第2号

◇ロシアのSFアンソロジー事情

モスクワのSF専門誌「イエースリ」の2007年10月号に、アレクサンドル・ロイフェによるロシアのSFアンソロジーの出版動向についての評論が掲載されている。この10年間に刊行されたアンソロジーのなかでかなり小部数のものも論じているし、歯に衣着せない率直で辛辣な批評になっているので筆者にも相当なインパクトがあった。

ロイフェの評論を待つまでもなく、近年のロシアのSF出版においては、SFアンソロジーが大流行している。こうしたアンソロジーは中短編の発表の舞台として大きな意味を持っているが、成功を収めている主要なアンソロジーとして、アーエステー社から刊行されている「ファンタスチカ」《Фантастика》やエクスマ社から刊行されている「ルースカヤ・ファンタスチカ」《Русская Фантастика》のシリーズがある。

特にアーエステー社の「ファンタスチカ」は現在のブームの口火を切った存在として注目される。「ファンタスチカ」は2000年に刊行が始まったが、第1巻には、ルキヤネンコ、ワシリエフ、ブリュチョフといった人気作家、グヴォルキャン、グロモフ、シニャーキンといった実力者の中短編のほか、ブリュチョフによる回想記、ペレスレーギンの未来学的評論、バイカーロフとシニーツィンによるSF時評が掲載され、ソ連時代にモロダヤ・グヴァルジヤ社から刊行されていた同名の年鑑アンソロジーを強く意識した構成になっている。このアンソロジーの成功により、アーエステー社のニコライ・ナウメンコは遍歴者賞を受賞した。

当時はSF専門誌は「イエースリ」しかなかったため、中短編の発表の舞台はきわめて限られており、筆者も「ファンタスチカ」の刊行には夢中になった記憶がある。

だが、ロイフェも指摘するとおり、この種のアンソロジーが粗製濫造気味となり、アンソロジーの質が著しく低下していることは憂慮すべき事態である。「ファンタスチカ」自体、当初は年鑑アンソロジーであったものが、2002年には3冊、2003年には2冊が刊行されるも、質の低下を招き、読者の関心を失い始めた。しかし、大手出版社のアンソロジーへの関心は高く、エクスマ社は2003年からファンタジーに特化したアンソロジー「ファンタジー」《Фэнтези》の刊行を開始、2005年からは先にあげた「ルースカヤ・ファンタスチカ」、2007年からは戦争SFに特化した《Русский фантастический боевик》の刊行を始め、拡大路線をひた走っている。一方で、サンクト・ペテルブルグのアズブーカ社からは前号でも活躍を紹介した評論家のワシーレイ・ウラジーミルスキイの編集になるアンソロジー《Лучшее за год》が今年から刊行され、注目を集めている。

この《Лучшее за год》はタイトルからも想像がつくとおり、ロシア版《The Year's Best》を目指しているのだが、ロイフェはウラジーミルスキイのことを「ロシアのドゾワ」と呼ぶも、アーエステーとエクスマというモスクワのライバル出版社との競争のなかで作品選定が自由にできず、アンソロジーの中身はその自信に満ちたタイトルに値しないと非常に厳しい批評を加えている。

確かに編者としてベストを尽くしたかというところとは言えないかもしれないが、実際にはなかなかよいアンソロジーである。

こうした年鑑形式のアンソロジーがロシアでは主流であるが、このほかにも、ルキヤネンコやペルモフらが審査員となったコンクール作品を収めたものや、猫、酒、火星といったテーマ別のアンソロジー、ロバート・シェクリーに捧げた「シェクリー・アカデミー」《Академия Шекли》、各種SF大会で開催されたセミナー参加者のアンソロジーがある。アエリータ（エカテリーンブルグ）やポルタル（キエフ）といった地方のSF大会の参加者によるこうしたアンソロジーの試みはモスクワに一極集中しがちなロシアSF市場のあり方に一石を投じるものだが、作品集として成功しているかということそこまでは言えない。

ロイフェの論調は、書評誌「図書展望」《Книжное обозрение》の編集者として出版市場でもまれてきた人間の視点に貫かれており、なかなかシニカルである。おそらく、アーエステー社やエクスマ社といった大手出版社は、ルキヤネンコやゴロワチョフといった大ベストセラー作家の短編を飾りとして収録し、中堅の実力派作家の中短編で中核的なSFファンの歓心を買ひ、シリーズものの長編などで売り出し中の若手作家の短編やシリーズ外伝を配置すれば宣伝効果も抜群だと考えているのだろう。だから、出版社にとっては傑作をバランスよく配置した「完璧なアンソロジー」の編集は第一義的なものではないが、アンソロジーはこれからも出版され続けていくとロイフェは考えているようだ。ロイフェは現在の出版構造に異を唱える気はない。中短編

を本当に見逃さずに読みたければ雑誌を読めと言うくらいなのだ。これは確かにロイフェの本音であろう。数年前には「ズヴォズナヤ・ドローガ」《Звездная Дорога》という小さなSF専門誌の編集長としてロイフェ自身も大苦戦した事実を思い起こすとき、雑誌への思いは相当なものがあるはずだ。裏を返せば、アンソロジーの問題は専門誌の問題でもあるのだ。専門誌の状況については別の機会にあらためて触れよう。

こうした状況でロイフェが期待を寄せるのはテーマ別のアンソロジーなのだが、そこでは編者のセンスはいかんとなく発揮されるかもしれないけれども、小説の問題のものには向き合っていないような気がする。現代では新作はあちこちで氾濫しているのだから、整理して、現代の作品にあるダイナミズムを示すこともアンソロジーの重要な役割ではないだろうか。そこは踏ん張ってほしいところである。

◇ 編集後記

第2号をお届けします。ロイフェの論じているアンソロジーのかんりの部分を持っているというのは愛敬としても、ある意味でロシアSF市場の最近の潮流を良い悪いは別にして追いかけてきたことがわかりました。そう頻繁にはありませんが、アンソロジーの収録作で「当たり」が出ると、読んでいて同時代を共有しているという興奮が得られます。そうした作品の紹介はまたいずれ。

ロシアSF瓦版:かぜのたより

第2号 2007年11月13日発行

編集人 宮風耕治

e-Mail k-veter@dream.ocn.ne.jp